



地元で捕れた魚について、市場で働く女性から説明を受ける研修員。手崎さんはコーディネーターとともに、フランス語訳も担当した

## 途上国のニーズに合った 地域密着型の研修を提供したい

JICA北陸で主に研修員の受け入れを担当する手崎雅代さん。いつも心の中にあるのは、研修員たちに北陸で学んだことを自国の発展に役立ててもらいたい、との強い思いだ。

### も

ともと海外に興味があったものの、なかなか一步を踏み出せず、大学卒業後は民間企業に就職し、システム営業を担当していました。しかし、やっぱり自分を試してみたい！海外で働いてみたい！との強い思いから青年海外協力隊に参加。PCインストラクターとしてカメルーンに派遣され、エデア市商工業高等学校で情報処理について教えました。実技授業用のパソコンが足りない中で、生徒全員が参加できるようにグループに分けて交替で授業を行ったり、現地の同僚たちと調整して実技が学べる授業を増やしたカリキュラムにしたりと、試行錯誤した2年間でした。

その後、人柄も気候も大好きなカメルーンでもっと働きたいとの思いから、外務省の「草の根・人間の安全保障無償資金協力」外部委嘱員※として、さらに1年間カメルーンに。現地の地方自治体やNGOなどから寄せられる「草の根・人間の安全保障無償資金協力」の要請に対して、応募書類の審査や案件のモニタリング、フォローアップなどに携わりました。そしてこうした海外での活動を通じて、より多くの日本人に国際協力の意義やJICAの活動を理解してもらいたいと考えようになり、昨年帰国。国際協力にまだまだなじみが薄い地元北陸で、その機運を高

めていきたいと思い、JICA北陸で働くことになりました。



JICA北陸  
業務課

手崎 雅代  
TESAKI Masayo

大学卒業後、民間企業に6年間勤務した後、青年海外協力隊に参加し、PCインストラクターとしてカメルーンで活動する。外務省の「草の根・人間の安全保障無償資金協力」外部委嘱員を経て、2010年4月より現職。

現在は、北陸3県にある地方自治体や大学、NGOなどと協力し、開発途上国の研修員が自国で応用できる知識や事例を盛り込んだ研修プログラムを提供できるように日々努力しています。これまでに

印象的だった研修は、新鮮なブリで知られる富山県氷見市で実施した青年研修「資源管理型漁業」コース。氷見市の伝統的な定置網漁法を活用した資源管理型漁業はもちろん、日本の漁業協同組合などの水産業を支える制度、流通システム、漁村振興に向けた取り組みを学ぶため、2010年にはアフリカ11カ国から13人の研修員が富山の地を踏みみました。

このコースを計画した際には、アフリカの漁業の現状を氷見漁業協同組合などの研修実施機関に伝え、彼らの知識と照らし合わせながら効果的な視察先の選定や講義内容などを練りました。研修には私も実際に参加し、研修員との話の中から、より効果的な研修づくりのヒントを得るよう心がけています。

嬉しかったのは、氷見漁業協同組合で経営方法などを学んだ研修員が、帰国後のアクションプランに組合の組織化を掲げるなど、多くの場面で彼らの熱心さを垣間見られたことです。そしてジブチの

帰国研修員から、早速現地で定置網漁法普及のために奮闘中との一報を受けたときは、やりがいを感じました。

氷見漁業協同組合をはじめめとする多くの北陸の人々も、自分たちの伝統や技術を伝えられることに喜びを感じ、このような地元密着型の研修コースを歓迎しています。研修を行うことで、国内、そして海外に地場産業を大きくアピールでき、氷見ブランドの知名度の向上、ひいては氷見市の活性化につながると期待しているからです。注目を集めるのが難しい地場産業を地元でもPRしていくよいチャンスといえるかもしれません。

これからも、JICAの在外事務所と連絡を密に取り合って研修員のニーズを把握し、そして地元の方々も協力しながら、北陸ならではの地場産業を通して研修プログラムをつくっていききたいと思います。



青年海外協力隊では、同僚の先生たちにパソコンのメンテナンス方法について指導した

※在外公館で、「草の根・人間の安全保障無償資金協力」の案件形成・監理・モニタリングなどを行うスタッフ。